

中川先生のご退職を祝して

二四〇

ステイヴァン・ドット
 訳 泉谷 瞬・庄 捷淳

中川成美先生がご退職の年齢を迎えられるというのは、信じがたい話です。世界中で開かれた様々な国際会議で先生にばったり出くわしたことが、まるで昨日のように思い出されます。私はいつも先生とお会いできることを心待ちにしていましたし、正直に言えば、先生をお見かけすることが無かった時は少し裏切られた気持ちすら覚えたものです。願わくは、ご退職なされた後も国内外の学会で引き続き交流できればと思っております。先生はそのような精力や熱意、アイデアを実際にまだ沢山お持ちですし、今後も長きに渡って日本文化と日本文学をプロモートする中心的な役割を果たして下さることを、私はまったく疑っておりません。

中川先生の学識、友情、そして優しさから受けた多くのご恩を十分に語り尽くすことはなかなか難しいことですが、その中でも特に、日本学術振興会の奨学金を受けた六、七年前から振り返ってみましょう。その頃私は、昭和初期の作家梶井基次郎に関する研究について長い一つの区切りをちょうど終えるところで、所属先であるSOAS（ロンドン大学東洋アフリカ研究学院）での校務や教育から離れ、一年間のサバティカルを取得したくてたまりませんでした。そんな時、中川先生はとても親切な様子で私を京都の立命館大学に招き、そこでの共同研究を提案して下さいました。先生にご助力頂いたおかげで奨学金を給付できたことは大変

な僥倖でしたし、立命館大学で過ごした一年間は、私の人生の中で最も幸福で生き生きとした時間だったと自信をもって言えます。先生にはどれだけ感謝しても足りません。

中川先生は私が梶井の研究を完了させるだけの十分な時間を与えて下さり、さらにその成果を原著の原稿にまとめることにも同意して下さいました（その原著は二〇一四年に出版が叶いました）。同じ頃、立命館大学で開催されたワークショップに先生から招待して頂いたこともあり、開催されたワークショップを対象とした集まりで発表する機会を、私は得ることができたのです。安部公房に関する専門的な知識は持っていませんでしたが、ここでの議論は、安部文学をはじめとした戦後の日本文学および文化的状況に対しての示唆を受け止める機会となり、中川先生や他の研究者たちから新たな知見を学ぶことができました。とりわけ、二〇〇九年に出版された安部公房の優れた研究書『崇高な声』の著者であるクリストファー・ポルトン氏にお会いできたことは、得難い経験です。中川先生によって議論の全体が巧みに主導されたこともあり、このワークショップは盛会に終わりました。

それから二〇一四年の春、アン・アーバーのミシガン大学でキース・ヴィンセント氏とアラン・タンズマン氏が企画した大規模な国際会議「漱石の多様性」で、私は中川先生と再会しました。先生は、日本近代文学

に関連する様々なお考えを説明した上で、ジェンダーとセクシュアリティについての素晴らしい卓見を発表されました。事実として、中川先生は日本のジェンダー・セクシュアリティ研究の分野における第一人者であるとは確信しています。日本の学術界では近年、この分野への関心が高まっています。先生はその遙か以前からジェンダー・セクシュアリティ研究を牽引する役割を果たされてきました。私たち国内外の研究者は、この分野に甚大な貢献をされた先生の業績に対して、まさに大きな「負債」を抱えているのです。

次に我々がお会いしたのは二〇一五年一月の立命館大学で、先生がクイア理論に関する非常に重要かつ画期的な国際シンポジウムを開催された時です。私は、一つの国際会議を組織するためにはどれだけの膨大な労力が必要であるのかを、十分に承知しています。クイア理論とジェンダー・スタディーズの領域で世界的に活躍する人物たち（その中には著名な教授たちにもひけをとらない、新進気鋭の研究者も含まれています）をこの会に多数招待したという事実は、中川先生がどれほど影響力を持った方であるかを如実に示していると言えます。だからこそ、シンポジウムが大成功を迎えたのはそう驚くべきことでは無いのです。また、多くの若手研究者や大学院生たちが大変熱心に参加していたことも、私の心を躍らせるものでした。このシンポジウムは、様々な差異を含んだ「クイア」な観点からの日本文化研究を今後促進させていくための、大切な財産になったと思います。

時間は少し前後しますが、梶井に関する研究書を完成させた後、私は二〇一四年度に日本へ戻って新しい研究を始めていました。その時は立命館大学ではなく東京の上智大学を拠点として、日本近代文学におけるクイア理論や翻訳理論をこれからの研究対象にすると決めていたので、そんな頃に立命館大学で先述のシンポジウムが開催されたのは、私

にとつてまさに完璧なタイミングでした。ここでの議論が、私の研究がより進展していくための大きな影響を与えてくれたことは間違いありません。実はミシガン大学での「漱石の多様性」において、私は既にこのテーマに関する研究を手掛けており、日本近代文学に対するいくつかのアプローチについて意見を提示したことがありました。具体的には漱石の作品で最もよく知られた小説『こころ』を、「クイア」な視座から考察するというものです。しかし、中川先生の企画されたクイア理論のシンポジウムに出席した今となつては、私の研究は未だ初歩的な段階に留まっていたと言わざるを得ません。先生からの励ましによって、私は自分のアイディアを今後洗練させていくための貴重な機会を得ることができました。

中川先生が私に投げかけた問いは次のようなものです。二一世紀の読者が、『こころ』をクイア・テキストとしてどのように解釈することが有効であるのか——？『こころ』のように極めて大きな影響力を持つ小説は、たとえ時間の経過や多様な文化間に晒されたとしても、その「意味」を効果的に翻訳し得るのか。仮にテキストがそうした意味を持っているのであれば、それはどのような形で存在するのか。さらに、同性間における欲望の性質について論じる際、小説が書かれた時点と百年以上も経った現在との間に、共通点は存在するのか。最後に、漱石の小説を読むという行為は、翻訳そのものの性質について新しい視点を提供してくれるものなのか——？

私にとつてこのクイア理論のシンポジウムがもたらしてくれたものは、多様で刺激的な研究者たちとの出会いだけではありませんでした。そこでの発表を基にした論文を、後に「クイア・テキストとしての『こころ』——翻訳学を通して」という題で執筆し、『世界から読む漱石『こころ』』（アンジェラ・ユー、小林幸夫、長尾直茂、上智大学研究機構編、勉誠出

版、二〇一六年）に掲載することもできたのです。

この論文の要旨を簡単に説明しましょう。私は翻訳理論とクイア理論の双方を用いて、論点の抽出を試みました。具体的には、西洋でも主要な二人の理論家を引用し、『ころ』の翻訳と同性間における欲望との繋がりを探求しています。その二人の理論とは、ヴァルター・ベンヤミンが一九二三年に書いた有名なエッセー「翻訳者の課題」と、ポール・リクルールの *On Translation* という文章です。私の試みがどこまで成功しているか、その評価は読者にお任せいたしますが——これら二人の理論を介在させることによって、漱石が百年前にどのような小説において性的指向とジェンダーの関連を描いていたのかを、現代の学術的言説の一環として私たちが理解できるように「翻訳」することが可能ではないかと考えました。さらに、日本文学を研究する西洋の学者として私は、漱石によって描かれた日本のセクシユアル・アイデンティティを、西洋的視点から理解できるように「翻訳」という問題にも取り組みました。このような難しい課題に私が専念したのは、中川先生が長年にわたって積み上げられたジェンダーとセクシユアリティについての画期的な研究から影響を受けたために他なりません。

現在、私は自分のプロジェクトを再構築している最中で、翻訳理論の観点から日本文学のテクストを引き続き研究しています。中川先生のご研究はそこでも私に再度、示唆を与えて下さいました。先生は特に、二〇世紀の日本文学に対するモダニティの意義およびモダニズムの役割に関心を持っておられます。私は最近、宇野浩二が一九二二年に書いた短編小説「夢見る部屋」を分析しているのですが、日本近代文学におけるモダニズムと広範な社会的、文化的、政治的環境との関連性を接続させる先生のご研究は、宇野の物語の中からも同様に幅広い関連性の考察が可能であることを気付かせてくれました。宇野の作品は、一九二〇年代の

日本人作家がモダニティの経験を構成する際、複雑で矛盾した要素をどのように理解しようとしていたかについて、教えてくれるのです。

「夢見る部屋」は、東京の小さな家で妻と子供と一緒に、退屈で単調な暮らしをしている男性を描いています。そして男は家族に知られないように別の部屋を借りて、様々な物をそこに運んでいきます。彼の秘密の部屋には、恋する女の写真を壁に投影するための幻灯機が置かれています。彼はまた、壮大な山々の写真も壁に映し出します。つまりこの部屋は、彼が過剰に欲望する美しいものを外界から遮断した上で幻想に耽るための、小さくて閉鎖的な空間として機能しているのです。文学と社会との関係を重視される中川先生の姿勢に啓発されたことで、私は宇野の物語を、一九二〇年代における東京の都市環境に浸透していた圧倒的な刺激に対する模索として解釈する可能性を考えています。さらに、秘密の部屋の壁に画像を投影するという行為は、一九二〇年代において日本人のモダニズム感覚が熱中していた外的な現象の「翻訳」として理解できるかもしれません。私の研究はまだまだその途上にありますが、現時点での考えは以上のようなものです。

私が取り組んでいるプロジェクトについて、中川先生は常に有益なアドバイスとご提案をして下さいますが、今後もぜひご意見を伺えれば幸いです。世界的な学者として、先生は立命館で多くのお仕事に励まれました。先生こそが立命館大学の威信を高められた方であることは、既に誰もが知るところでしょう。しかしながらこの度のご退職を機に、自由な時間を楽しまれるだけでなく、常々関わってこられた様々な分野に全力で集中されることによって、斬新かつ卓越した研究を切り拓いていかれることを願ってやみません。中川先生、これまでのご学恩に厚く御礼申し上げます。先生の輝かしい未来と、そして、これからも共に最高の研究ができることを心よりお祈りしております。

(ロンドン大学東洋アフリカ研究学院教授)

中川先生のご退職を祝して

